

巻 頭 言

学校長 高 桑 康 雄

本校の紀要もこの号で24集を数えるに至った。教育学部の附属学校として、教育の理論ならびに実際について研究を行なうことが使命のひとつとされる本校であってみれば、こうして毎年毎年研究の成果を公けにするのは当然であると言え言えるのかもしれない。しかし、このように永年にわたって研究活動が持続され、また継承されてきていることは、やはりみなみなでない努力の賜というべきであろう。その意味で、この24集に及ぶ研究成果の集積にはある種の重みを感じるのである。「継続は力なり」ということばがあるけれども、それは本校の紀要に示された研究の積みあげにも当てはめることができるであろう。

こうした研究——学校において実践的な課題に取り組む研究は、今日その必要性が強くさげばれているものである。それはなによりも、学校における実践的な研究を通じて、その学校の主体的な教育課程編成がなされなければならない、という認識がようやく広まりつつあるからである。今次の教育課程の基準の改訂にあたってそのことは強調されているのであるが、単にそれだけの理由ではない。もっと根本的に、教育課程というものは本来、それぞれの学校がみずからの課題に即し、子どもたちの実態に応じてたてられるべきものだという本来的な考え方が受け入れられてきたからである、とあってよからう。

このような考え方が受け入れられるようになったひとつの契機は1974(昭和49)年に東京で開かれた「カリキュラム開発に関する国際セミナー」であったといえる。このセミナーは文部省とOECDの教育研究革新センター(CERI)とが共同主催で開いたものであったが、OECD諸国からの参加者を加え、カリキュラム開発をめぐる多面的な討議が行なわれた。

討議の中心は、学校での教育を有効なものにするために、学校が常に前進的で社会的必要に対応しうるカリキュラムを用意しなければならないという認識におかれ、そのための考え方や方策を検討するところであった。

この、カリキュラムを常に改革し、新鮮で有効なものにしていく活動を「カリキュラム開発」とよんだのであるが、重要なことは、その継続的な作業の過程において、個々の学校の果たす役割りがきわめて大きい

ことに注意が向けられた点である。カリキュラムといえば、ただちに国の作成する学習指導要領のことだ、ときめてかかる捉え方が深く浸透しているわが国の状況の中で、それはともかくも発想の一大転換を促すものであった。これが「学校に基礎をおくカリキュラム開発」の考え方である。このような学校でのカリキュラム開発の試みの積みかさねが、地域や国レベルでの努力とあいまって、より体系的なカリキュラムの編成と発展につながっていくのだと考えられている。

学校に基礎をおいてカリキュラムを開発していこうとするこの考え方では、いうまでもなく、それぞれの学校の研究活動とそれを推し進めていく創造性、そしてそれを校内に組織化していく協同性とがとくに求められている。

さて、このような動向から考えてみると、本校の教官が個別に、あるいは集団的に続けてきた研究とその成果としての紀要の積み重ねのもつ意味が小さくないことがわかる。

研究の内容についていえば、教科の内容についての分析的考察あり、また教科指導の実践過程に関する授業研究的なものもみられる。また、海外の教育視察の報告も含まれるなど多岐にわたっている。しかし、どのような研究テーマにしても、それに取り組むことによって、教師ひとりひとりがもういちど自分自身の実践への取組みを客観的に把え、自分をふりかえる機会となったはずであるし、そうでなければ研究の価値は半減してしまう。授業研究などは明らかにそうした自己の客観化の努力といえるが、教科の内容としての教材研究にしても、海外視察にしても、じつにこの自己の客観化の契機としての観点が不可欠のものだと思うのである。

学校に基礎をおくカリキュラム開発に力を与え、その基盤となる創造性というものは、したがってもうすこし厳密に言えば、教師ひとりひとりが自分自身の教育実践——子どもの捉え方と、それを基にした教材の組織化や指導の進め方——を問題にし、また教師相互にもそれを検討しあいながら、より効果的な、より適切な教育のあり方を模索するということに特色があるというべきであろう。ここに寄せられた諸論文にそうした意味あいを認めていただければ幸いである。